

4月7日 命結ぶ 希望の架け橋 気仙沼大島大橋開通 “1967年宮城県策定の計画から52年かけて橋が完成 付度していれば、国直轄でもっと早くに完成したのに！”

「気仙沼市の大島と本土を結び、東北初の離島架橋となる気仙沼大橋（356m）が4月7日、開通した。島民利便性向上や島内観光の振興にくわえ、非常時の緊急輸送路としての役割が期待される。東日本大震災からの復興の象徴に位置づけられ、地元の悲願が、世紀を経て実現した。」（「河北新報」19年4月8日付け）

「津波は東北最大の有人島に大きな被害をもたらした。市の調べでは犠牲者は33人、被災家屋は全壊776棟を含む1,404棟で島全体の約4割に上った。本土と島を結ぶ、フェリーなど7隻が使用不可能となり、船着き場はがれきで埋まった島は孤立し、電気水道も断絶。島民は一時、プールや沢の水を浄化してしのいだ。」（「同」1月12日付け）

「約2,500人が暮らす島の高齢化は著しい。65歳以上の高齢者率は50%を超え、気仙沼市全体より10ポイント以上も高い。健康面で不安を抱え、本土の病院に通う島の高齢者は少なくない。」（「同」19年1月10日付け）

定期航路大島フェリー 110年の歴史に幕

「110年以上にわたり、島と本土を結んだ定期航路は、橋の開通と同時に運航の歴史に幕を下ろした。定期航路は1906年に個人が始めた手こぎ船が始まり。48年に現在の運航会社大島汽船ができた。島から本土に通う島民の生活を支え続けた。乗船時間は約25分。島民同士が互いの近況を語り合ったり、学生が受験勉強に励んだり、読書をしたりする貴重な時間だった。無職千葉敬さん（68）は「年寄りから子どもまで、みんながコミュニケーションを図る大事な場所だった」と振り返った。スーパー店員の菊田正佐子さん（63）は「私たちの足であり、命だった。橋ができるうれしさもあるが、船が無くなる悲しさも大きい」と話した。」（「同」19年4月8日付け）

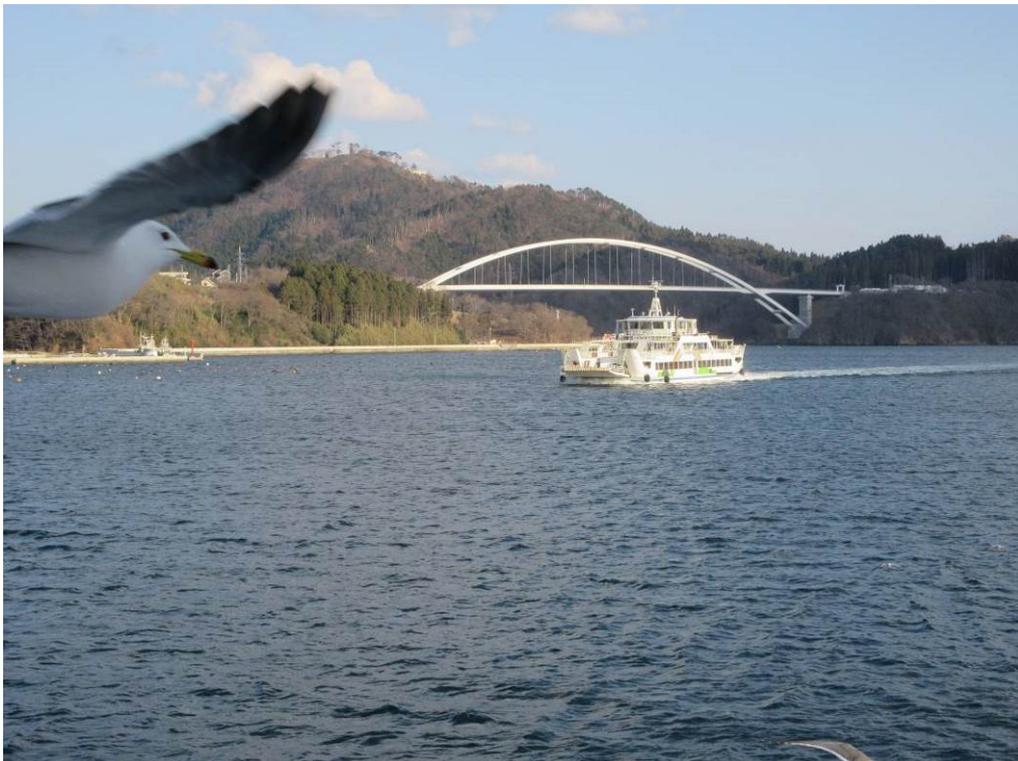
「開通後、大島汽船（気仙沼市）は1日16往復ある定期船を廃止する。市は民間のバス業者に委託して島と本土を結ぶ路線バスを通すが、本数は船の半分の8往復に留まる。

説明会では、「運転免許がない住民への配慮が足りない」「もっとバスの便を増やして」などの声が挙がったが、市は「大半の島民は自家用車を利用することになる」と譲らなかった。市が全島民を対象に昨年9月実施した交通に関するアンケートによると、自家用車がない世帯は約1割。免許返納を検討している高齢者もいる。島に住む女性（76）は「足の確保を心配している住民が多い。『橋が架かって不便になった』という声が挙がる可能性もある」と指摘する。」（「同」19年1月13日付け）

【橋が架かった大島の 今後の課題】

- ① 大島と本土を結ぶ1日16便のフェリーが廃止されて 1日8往復のバスに
- ② 島なので、今までは鍵をかけなかったが、これからは鍵をかける生活に
- ③ 大島の観光は日帰りでもできるので、観光客をいかに大島に宿泊してもらうか

【大島大橋（左側が本土・右側が大島）と大島フェリーとカモメ（気仙沼市内湾）】



【4月7日で廃止になった大島フェリー（気仙沼エースポート）】

